江戸から平成に蘇生したカブキと劇場
～扇町公園に平成中村座がやってきた～

平成十四年の秋、扇町公園に、仮設テントがお目見えした。その名も「平成中村座」。十一月二日から二十六日、その仮設の芝居小屋で、本格的な歌舞伎が上演された。出演者は、中村勘九郎、中村福助、中村扇雀、中村橋之助、坂東弥十郎、片岡亀蔵、笹野高史（敬称略、以下同様）をはじめ、魅力的な俳優が勢揃いした舞台に大勢のお客さんが詰め掛け、連日満席であったという。

「平成中村座」とはなにか？　昔、江戸で興行を許された芝居小屋に、中村座・市村座・森田座があり、江戸三座と呼ばれていた。（大阪でいう道頓堀五座のようなもの。）その一つである「中村座」の代々座元をつとめていたのが、中村勘三郎。中村勘九郎の父の名前であり、その由緒から、勘九郎本人が「中村座」という名前のつく小屋で芝居をしたいと以前から願っていたという。さらに、昔の芝居小屋は、舞台と客席が非常に近く臨場感あふれる場であった。歌舞伎をもっと多くの人に身近なものとして親しんでほしいと、平成の今、昔ながらの芝居小屋を再現する形で“平成の中村座”と銘打った小屋での興行が、松竹の手によって実現したわけである。

平成十二年十一月、浅草、隅田川のほとりでの柿落としでは、その隅田川界隈が舞台でもある「法界坊（正式外題を「隅田川続俤」という）」が上演された。何度も上演されてきたお芝居であるが、現行の台本ではなく、初演時（初演は一七八四年　天命四年）の台本で、また演出を串田和美により（通常、歌舞伎には演出家は存在しないという）、素直な現代人の感覚を生かしながら、つくりあげられたようだ。仮設小屋ならではの“日本一低い宙乗り”の噂は当時、関西まで届いていた。翌年、同時期、同場所で「義経千本桜」が上演され、三年目に「大阪公演」として、扇町公園に位置する関西テレビの熱意により「平成中村座」がやってきたのである。演目は、大阪を舞台にした「夏祭浪花鑑（なつまつりなにわかがみ）」と初演時に話題を集めた「法界坊」である。

筆者もチケットを何とか入手し、足を運んだ。小屋の周辺には幟が何本もたち、チケットもぎりの入り口をくぐると、木造の芝居小屋を思わせるテントが。木戸の正面の櫓幕には、座紋の「隅切に銀杏」が染め抜かれている。客席には靴を脱いで入るが、中村座のお茶子姿をした案内人が親切に誘導してくれる。場内座席は、松竹梅桜とわかれており、平場席の松席（一席一席背もたれがついている）や、幕の内側の二階桜席（幕が下りても舞台上の転換や役者の出入りが手にとるようにわかる）、豪華弁当サービス付きのお大尽席と特徴がある。また、お芝居は正面の舞台上や花道だけでなく、通路や二階席なども利用され、小屋全体が芝居空間となる。いずれの席からもすぐそばに役者が感じられる贅沢さが大きな特徴である。現代の大きく立派な大劇場とまた違う昔の芝居小屋ならではの熱い空間がそこにはあり、芝居見物がこんなにどきどきわくわくさせられるものかと新鮮に感じた観客も少なくないだろう。例えば、「夏祭浪花鑑」では、本物の泥を用いた舅殺しの陰惨なシーンで（客席は松席 4 列目まで、泥が飛ぶからと配られた“かっぱ”をかぶっている）暗闇の中、蝋燭（ろうそく）の灯りが映し出す主人公の団七と舅の緊迫したやりとりにくぎ付けになる。その直後、突然舞台背景がバーンと開き、真っ暗闇にさっと明るい光が差し込みのどかな扇町公園から大阪キタのビル街まで現れ、祭りの地車囃子と群衆に殺人劇

も飲み込まれていくという演出、さらには、ラストシーンで、再び開放された舞台後方、扇町公園の中へ役者（勘九郎と橋之助）が二百メートル近く走って消えていくという幕切れなど、その型破りな発想と体当たりの演技に、思わず声を発してしまうほど驚かされ、胸がすくほどの充足感を覚えたのは私だけではなかろう。客席は総立ちの拍手喝采であった。劇場外にも、最後のシーンを見ようと集まってくるファンや地元の人たちが日増しに増えていった。子供や犬連れの地元の主婦らしき人たちが、何組も嬉しそうに待っているのが印象的であった。千秋楽には、公園がファン（にわか地元ファンも多かったと思われる）で一杯になり、さらに、既に出番を終えた主な役者さんたちが公園で待機、最後に全員で、公園から舞台へ走ってもどるという華やかな幕切れであった。

平成中村座は、天神橋筋商店街をはじめとする扇町・天満地域に根ざした小屋になることを目指していた。扇町公園で小屋がけされるいきさつや、製作過程などについて、平成中村座大阪公演支配人の上田浩人さんにお話をうかがった。

―立地―

中村勘九郎さんは、以前から大阪公演を強く希望され、立地にもこだわっておられたという。江戸期には芝居小屋は川沿いに並んでいたという歴史もあり、中之島公園が検討されていたが、一方の候補地が天満だった。天満はその昔、ミナミの道頓堀に対するキタの劇場街であり、十三代目の片岡仁左衛門も何度か舞台に立っておられる。天満宮や活気ある商店街もあり“盛り場”的要素があるからだった。しかしそれらとは別に現実的な問題もあったようだ。「やはり、お弁当も芝居見物の楽しみの一つで大事にしたいと思いました。客席で食事をしていただくには、臭いの点で水洗トイレが必須であったわけです。中之島公園では水洗は不可能で、舞台機材の搬入などのトラックも出入りが難しかった。天満では、歴史的な土地性と現実的な条件、両方が兼ね備わっており、扇町公園が最適だと考えました。文化都市を提唱する大阪市の磯村市長の多大なるご理解ご支援により、公園使用許可、上下水道設置、行政面での後援を戴いたのも幸いした」と上田さん。

次の課題は、地元の方の同意と応援を得ることだった。

―地域と芝居小屋―

勘九郎さんは、「芝居小屋は地元に支えられた劇場であるべきで、地域の方にも平成中村座の元気を受け入れてほしい」と、強い思いをお持ちだったという。宙から降りてきた仮設小屋ではなく地に根をはった地元の小屋になること、それこそが、江戸期の芝居小屋のあたたかみを再現しうる条件の一つである。地域にいかに支えてもらうか、勘九郎さんがこだわり、上田さんがもっとも苦労されたことである。地域の役員の方の理解と、多くの人の応援をもらうため、商店街で、大阪公演お披露目の「お練り」が企画され、公演に先立つ七月末、浴衣姿の主演俳優たちによる人力車パレードが賑やかに行われた。住まい情報センターから出発して南へ約三.二キロ、商店街の壁には、平成中村座大阪公演のポスターがずらりと貼られてあり、紙ふぶきが舞う中、六千人あまりのお客さんが声援にかけつけた。このプレイベントの成功で、天満界隈に公演への期待・歓迎ムードが高まり、興行の成功を導いたといえる。

「北区の議員や地域振興会の会長、商店街の会長の方々に、単に儲けるためでなく、大阪の文化のため、地域のためにもなると、公演日の一年半前頃から話をしてご理解いただき、好意的に応援していただきました。大阪人は自分で見てさわったものでないと、その気にならないので、商店街でのお練りを企画したのですが、商店街の中に特別事業委員会を設置してご準備いただいたりと、北区商店会会長にもご尽力いただきました。スタッフがポスターや紙ふぶきを四回にわたって約八百軒に渡したり、当日、各商店が店の前にたくさん商品を並べているのを下げてもらったりしたおかげでお練りは大成功でした。勘九郎さん、福助さん、扇雀さん、弥十郎さん、亀蔵さん、笹野高史さんの六名でのパレードで、橋之助さんだけが、どうしてもスケジュールがあわずに参加していただけませんでしたが、役者も地元の人もテンションが上がったと思います。弥十郎さんなどは、お練りの途中に、舞台で使う数珠を購入されていましたね。商店街にお渡ししたポスターがほとんど貼られていたことが本当に嬉しかった」という上田さんは、お練りが終わった後、数名のスタッフと約三.二キロ、紙ふぶきの掃除を夜までかかって手作業でされたという。「お店の方々にも手伝っていただきました。これで、地元の方も、自分たちの小屋がくると思い始められたのではないでしょうか。」

―扇町公園で生まれた、話題の演出―

昼の部の「夏祭浪花鑑」のラストシーンの演出が特に話題にのぼった。上田さん曰く「あれは、初日の五日前に決まったんです。演出家の串田和美さんと勘九郎さんが、テント小屋の周辺を長い時間歩き回られてなにか相談しているなあと思っていましたら、舞台の後ろ側を公園へ開け放してほしいとおっしゃったんですね。役者が公園に走るなんて面白いのは確かですが、劇場外なので、一人でも邪魔する人がいたら壊れてしまう危険性があります。それが、非常に心配だったのですが、開幕してから事故は全くありませんでした。みんな応援してくださいました。」

いくつもの歌舞伎や現代劇などの公演現場に立ち会っていらっしゃる上田さんであるが、この平成中村座に関しては、独特の一体感があったという。「普通であれば、稽古の時、自分の出番が終わった役者さんは帰ることが多いんですが、中村座の場合は、全員、すべての稽古に立ち会って、ああだこうだと言い合っていて、演出家や勘九郎さんに“こうした方がいいんじゃないか”などと提案したりする。台詞のない通行だけの役者さんまでみんなで一つの場面をつくっている。みんなこの公演を気に入っているんだなあと感心しました。」

―地域で小屋を見守っていたー

松竹の事務所には、公演中毎日地元の人からさまざまな電話がかかっていたという。「幟が倒れてる」「電気がついたままだけどいいんか」「菊がしおれてる」など、ジョギングや散歩する人が気がついたら連絡をされていたようだ。お金を払って観劇しない人でも、自分のまちの小屋として見守っていたのであろう。

また、平成中村座の俳優やスタッフなども、昼ご飯など、天神橋筋商店街のお店の常連になっており、打ち上げパーティ会場も、ホテルではなく意図的に商店街のお店が選ばれた。上田さんによると「市松という店の名前が、劇中の子役の名前と同じだったので、気

に入って決めたのですが、勘九郎さんも喜ばれて、“ また中村座が来るから、今から予約できる？ ” とおっしゃていました。お店の方も “ 前もって言ってや。なんでもサービスするで ” と答えていらっしゃいましたね。」「この公演は、役者やスタッフにとって、一期一会の異次元の体験だったと思います。地元の住民の方にとっても、ハレの日だったのではないでしょうか」。（実際、お天気も、小雨が 1 日あっただけでほとんどが晴れであった。）

中村勘九郎さんが、劇場と客席の熱い交流を体験されたのは、道頓堀中座での「釣女」という演目で客席から手拍子が沸き起こった時であり、また金毘羅歌舞伎の金丸座での公演であると聞く。いずれにしても、長い歴史を刻んできた芝居小屋であるが、それを守り盛り上げる地元の人々の存在抜きには語れないだろう。自分たちの小屋感覚をもつ機会に恵まれるケースが少ない最近において、地域に根ざした小屋と住民のあたたかい関係と、それがもたらす祝祭性に、天満の方は目覚めたのではないだろうか。また、歌舞伎といえば、難しくとっつきにくいというイメージがあるが、天満界隈に住む若い学生やＯＬを中心に人気があったことも予想外で再発見であったという、天神橋筋商店街の某会長さんの声も印象に残る。もともと歌舞伎とは、若い人も気楽に見に行ける娯楽であり、平成中村座も、ほんの数分の最後のシーンだけは、誰でも（無料で）役者の走る姿が見れるということで、昔の大衆性をより色濃く再現させたのかもしれない。

江戸期には当たり前であった、芝居小屋とその周辺地域の賑わいの文化が、今日、天満で甦った。商店街もある意味で昔の花街的役割を果たし、常連となった東京の役者さんを天満人ならしめた。これから天満にも小さな小屋ができるようであるが、地域と劇場、地域と演者の相思相愛、お互いを元気づける関係のあり様を教えられたように思われる。

いつの日にか、また平成中村座がやってくる。戻ってくると言った方がいいか･･･。地元の方からどんな「気」をもらえるのか、勘九郎さんはじめとする出演者やスタッフの方々は、きっと楽しみにされていることであろう。また、我々も、天満の地で、どんなエネルギッシュな舞台が展開されるか、新たなコラボレーションが生まれるかどうか、今から待ち遠しいものである。